青年期における男性の身体像に関する考察

藤田　智子

This study investigates the subjective recognition of male adolescents' body image using semi-structured interviews with 8 high school male students. These high school male students internalize the stereotypes of male and female body images (i.e. the male body is bigger than the female body). Their bodies are measured at school and gendered by influences of others (e.g. their mothers, sisters, friends, and mass media). They adhere to a standard of 170cm in height; at the same time they want to be taller and more muscular. Furthermore, their family members (except their fathers) evaluate their bodies. They also compete with one another in height. Therefore, they are under family and peer pressure. Conversation is held not for communication but for competition. Male bodies different from the standard image are not positively recognized. They continue to compete with one another in masculinity unconsciously. By positively recognizing the diversity both male and female bodies, we can have a better understanding of gender.

キーワード：身体像、青年期、男性、ジェンダー

はじめに

身体に対する社会的な美の基準による評価は、今までは女性に対する評価であるとされ（井上 1991）、客体としての女性、即ち「他者からのまなざし」（梶田 1980）[1]によって自己規定をする女性の問題とされてきた。一方、男性の身体は「美の規準による判定を免れ隠蔽されてきた」（荻野 2002、p.371）のである。女性は、「たえず身体的な外見によって値踏みをされ続けながら成長するために、女の自己意識と外見とは引きはがすことのできない表裏一体のものと化している」（同、p.362）のに対し、男性の場合には、「身体や顔の美醜といった外見に、その人間の価値評価の基準としてきわめて低い順位しか与えないという文化的合意（『男は顔じゃない！』）が存在しており、一般に自我意識と身体との結びつきが女よりもはるかに希薄」（同、p.369）であるとされてきたのである。上野千鶴子の言葉を借りるならば、「産業化とともに男性には『生産への疎外』が、女性には『生産からの疎外』が起きた……男性には効率的で生産的な身体がわりふられ、その結果、男は美から疎外された。美は女性の独占物になった」（上野 1995、p.4-5）のである。

荻野美穂は、「男＝普遍、女＝特殊という知の枠組み」のもとでは、「とかく身体＝女の身体と理解されてしまうおそれがある」ことを指摘した上で、次のように論じている。

> 身体の問題に関心を持った男性の歴史家は男の、すなわち自らの身体を対象として取り上げる方向へではなく、またしても女の身体へと向かうことになりがちである。……「女の身体を問題にしてきた歴史を問題にする」という形をとってはいるが、結局そこで対象化されているのはあいも変わらず「他者」の身体、男にとっての客体としての女の身体なのであって、男自身の身体性には解析の目は向けられず、身体＝女という前提は微動だにしない。（荻野 2002、p.114）

美の規準よる評価の対象としてだけでなく、研究の対象としても、男性の身体へ目は向けられず、女性の身体のみが扱われてきたのである。

上野は「客体としての身体」に関して、次のように指摘する。

> 「美」と同時に、「客体としての身体」もまた、女性に排他的にわりあてられた。現象学的な知によれば、身体は主体にとって「客体」として発見され、そのことをつうじて主体と外界との媒介となっていくが、性別二元制のもとでは女性が過度に客体としての身体へと疎外されるのに対し、男性は自分自身の「身体からの疎外」を経験する。（上野 1995、p.5）

さらに、荻野は、男性の身体はいまもなお、かつて女性の身体がそうであった以上に、予断と神話に満ちた暗黒の世界のままにとどまっていると述べた上で、「社会集団として、ジェンダー・カテゴリーとしての男の歴史」が書かれうるためには、「研究者自身が自らの性はいかなる『歴史的素材によって織りあげられている』のかをたえず自問しつつ、これまでの歴史観や世界像を新しい目で整理しなおしていく覚悟が必要」であるとする。さらに、整理しなおすことによって、男性が「身体をも含めた形で歴史化されていくか否か」ということが女性史の今後にとっても重大であるとする。それは、次のように考えられるからである。

> 女の歴史がこれまで語ってきたことばが歴史学全体の共通言語として理解されるようになり、女性史が現在のゲットー状態から脱け出しうるかどうかは、「男」もまた普遍的・抽象的な「人間」ではなく「女」と同様のジェンダー現象であることが、どれだけ広く深く認識されていくかにかかっているからである。そうした相互的な視点が伴わないかぎり、過去の、あるいは私たちが現在生きている歴史の基本的動因としてのジェンダーの働きを総体として可視化していくことは、結局は望み難いのではないだろうか。（荻野 2002、p.120）

男＝理性／文化、女＝肉体／自然という二項対立図式において、もっぱら身体性に閉じ込められながら、自らはその身体について語る自由を持たなかった女性にとって、女の性と身体の疎外が歴史的にいかに形成されてきたか、そして女性自身がどのように性や身体を語る言葉を見つけていくかという問題に答えを求める作業は、女性の身体とは自然でも所与でもなく独自の歴史を持つ文化的、社会的産物、すなわち制度であることを明らかにしてきた。だが、男性の身体は対象とされず、客体としての女性の身体のみが存在し続けるのであれば、やはり不十分であろう。「語られない男性の身体」というのもまた、文化的、社会的に形成されたものに他ならないからである。

青年期の特徴のひとつは、自己の身体への評価が内面と深く結びつき、自尊感情を大きく規定するこ

とであるとされる（山本・松井・山成 1982）。そして、青年期においても、自己の身体への評価と自尊感情の結びつきが特に女性において顕著であること（山本・松井・山成　1982 など）、各身体領域の重要度は性別による違いがあることから身体の果たす役割が男女で異なること（中島・太田 1980）などが指摘されている。青年期女性にとっての身体の意味が強調されてきたのである。

欧米での青年期における身体像に関する研究においても、肯定的な身体像（body image）は高い自尊感情（self-esteem）や、より肯定的な自己概念（self-concept）と関連があること（Mendelson et al. 2002; Tiggemann and Wilson-Barratt 1998; Guiney and Furlong 1999 など）が明らかにされている。また、自己の身体を不満足だと思う傾向は、青年期において最も高くなり、特に女性において、社会的な理想の女性身体像から遠ざかりうるため顕著であり、男性は青年期に筋肉が増えることによって社会的な理想の男性身体像により適合するため、自己の身体像への評価は高くなること（McCabe　et　al. 2002）などが明らかにされている。だが、身体像に関する研究は主に女性に関して行なわれており、それは、特に体型やサイズに関する女性への社会的圧力は、男性に対する圧力よりも顕著であるということが一般的に合意されているからである（Grogan and Richards 2002）。

上野は、「思春期病理というもののジェンダー差が、相対的に縮小してき」たことを根拠に、「男たちも身体的・外見的な価値とかパフォーマンスが他者から値踏みされる時代になった」のだと論じている（上野 2002a、p.78-87）。上野のいうように、思春期病理における「ジェンダー差」は縮小してきているかもしれない。男性の身体も客体として存在するようになったかもしれない。だが、自己の身体への評価が自尊感情と深く結びつくとされる青年期に関しても、男性が自己の身体をどのように認知しているかを分析した研究はほとんど見受けられない。青年期においても、問題とされるのは、やはり女性の身体なのである。文化的な変化により、男性におけるエクササイズや健康的なダイエットの助長への関心は高まっているが、男性が自分自身の身体、すなわち自己の身体像をどのように認識しているかや、男性において身体のどの部分に満足や不満足を感じているかはほとんど明らかにされていないのである（Grogan and Richards 2002）。

だが、荻野（2002）が指摘するように、女性の身体のみを扱うのでは、ジェンダーと身体の関係を論じるのに不十分であると考えられる。また、ジェンダーという知は「日常知」[2]と関連づけて捉えることができる（浅野 1996）。だが、日常知は必ずしも自覚的に捉えなおされ理論化されたものではない。伊藤公雄が「自分の性としての〝男性性〟というものを、客観的に相対化する作業が、どうも男性の方には弱い」（1996、p.24）と指摘するように、男性の身体に関する日常知もまた、男性自身によって相対化され、自覚的に捉えなおし、理論化することはされておらず、ジェンダー研究者によってもなされてこなかったといえるであろう。

そこで、本論文では、自己の身体への評価が自尊感情に強く結びつくとされる青年期にある高校生の男性に対するインタビュー調査を通し、その身体像の認知のあり方を検討する。青年期の男性が、日々の生活の中で、自己の身体像をどのように認知しているのかを示すことを通し、男性の身体を可視化することが目的である。つまり、「日常知」である男性の身体に関する「語り」を捉え直し、青年期における男性の身体像の認知のあり方を理論化することを目指す。

１．身体像の定義

身体像は、他者と関わり、社会化されていくことで形成されていく（依田 1979）。他者とは、家庭内における人間関係という私的なものと、学校での教育および友人関係、マスメディアなどの公的なものを含む（船津 1995，多賀 2001）。ポール・シルダー（Paul Schilder）の言葉を借りるならば、対人関係、環境、時間因子を含む「三次元のイメージ」である（Schilder 1935＝1987）。身体像は可塑的であり（Gorman 1969＝1981）、他者との関わりにおいて、身体への評価が行われ、身体像の重要な部分として内在化される（依田 1979）ものなのである。

また、「身体と社会」という問題設定の中には、身体の社会性と社会の身体性が含まれる。その際、人間存在が身体としてしか世界の中で呈示されないとする現象学に依拠する（井上・富永 1991）。

本研究において、身体像といった場合、以上の意味において用いる。

２．研究の方法

⑴　研究の方法と意義

本研究は１章で述べた身体像の定義より、現象学に基づく。また、身体像は他者との関わりにおいて形成されることから、象徴的相互作用論にも基づく。

象徴的相互作用論に立って実証研究を行うときに焦点が当てられるのは、個人が自分の行為やとりまく環境に与える主観的な意味である（Uwe 2002＝2002、p.23）。また、ハーバート・ブルーマー（Herbert Blumer）によると、象徴的相互作用論では次の「三つの明快な前提」を踏まえるものである。

> 第一の前提は、人間は、ものごとが自分に対して持つ意味にのっとって、そのものごとに対して行為するというものである。……第二の前提は、このようなものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生するということである。第三の前提は、このような意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりするということである。（Blumer 1969＝1991、p.2）

象徴的相互作用論のこのような立場は、身体像の認知のあり方を分析するのに最も適していると考えられる。

象徴的相互作用論の立場にたち、主観的なものの見方を分析するために、方法論的アプローチとして主観的理論をとる。主観的理論は、人々の主観的視点と彼らが経験や出来事に与える意味に焦点を当てたり、また事物、行為、出来事などの意味を志向したりする研究方向である（Uwe 2002＝2002、p.25-26）。その手法として、インタビュー形式をとる。インタビューにあたっては、半構造化インタビューを用いる。半構造化インタビューは、回答の自由度が高く、調査対象者の主観的視点に容易にアプローチできる手法（多賀 2001; Uwe 2002＝2002）だからである。

⑵　調査の概要

今回の調査では、東京23区内に在住かつ在学する高校生である男性８名を対象として、一対一の半構

造化インタビューを行った。対象者は、知人、都立高校の家庭科教員などから紹介してもらい、更にその友人やアルバイト仲間から協力者を募った。

インタビューでは、１章で述べた身体像の定義に基づき、「自分の身体で嫌なところや、もっとこうなったらよいなと思うところはあるか」「友達や家族と身体についての話をするか。また、普段どのような話をするか」「雑誌やテレビで身体に関するものを見たことはあるか。また、普段、どのような雑誌やテレビを見るか」などの質問項目を中心に、自己の身体をどのように認知しているかを、身体に関する他者との関わりを交えながら、自由に語ってもらった。

〈表１　調査の概要〉

調査時期	2002年（平成14年）４月から７月
調査対象者	東京23区内に在住かつ在学している高校生　男性８名
調査対象者の選定	スノーボールサンプリングによる有意抽出
調査場所	コーヒーショップ、家庭科準備室、知人宅のリビングなど
調査方法	半構造化インタビュー。一対一で行い、時間は一人30分から２時間

⑶　データの性質

本研究に用いるデータの性質については、いくつかの考慮すべき点がある。

まず、データの「代表性」についてである。「ジェンダーと外見の関係や男性性の特徴には生活をしている地域や本人の年齢によって大きな違いが存在することも考えられ」（須長 1999、p.25）、またスノーボールサンプリングを用いたため、ある程度偏ったサンプルであることは否めない。だが、年齢や生活している地域を限定したのは、個人がどのように身体像を認知しているかを明らかにする上で、地域や年齢による差が少ないほうがよいと判断したためである。また、データの信頼性に関してもいえることであるが、対象者とラポールを構築するためには、信頼できる紹介者があいだに入るということは有効な方法であると考えられる。

ただ、あまりにも同質の対象者となるのを防ぐため、サンプリングの際は、紹介者を複数にすること、同じ紹介者であってもできるだけ異なるつながりの対象者を紹介してもらうことで、対象者の生活圏が極力重ならないようにした。対象者のうち、同じ学校に通う者はおらず、対象者同士が、基本的に日常的なつながりを持っていない。

本研究の目的は、今まであまり対象化されてこなかった、「男性の語り」を客観的に相対化することであり、データの代表性を過度に追及することは、今回の調査に関してはさほど重きをおいていない。もちろん、データの限界性を考慮した上で、限定的な解釈、あるいは先行研究や他の資料との総合的な判断を心がけた。

次にデータの「信頼性」についてである。本調査では、インタビューという形をとっているため、対象者のバイアスや忘却、記憶違いなどによって、誤った情報を報告してしまうかもしれない。だが、本研究では、対象者の「日常知」という「主観的現実」を明らかにすることを目的としており、「勘違いや忘却はデータを歪めるものであるというよりも、それ自体がデータとしての対象者の主観的現実」（多賀 2001、p.78）であるとする立場にたつ。また、質問項目を設定しておくことに対し、対象者の主観的現実を歪めることになるという批判があるかもしれないが、「生活のどの側面を把握し、解明しようとしてい

るのか」という「調査者の主体的な構え＝視点があってはじめて、それに呼応する対象のある側面が姿を浮かび上がらせてくる」（谷 1996、p.7）のだと考えられる。つまり、インタビュー調査において得られたデータは、「『語りの場』において創造されたまぎれもない『社会的現実』」であり、「聞き手と語り手の相互作用を通じて構築された、両者の共同作業の産物としての、語り手の主観的現実」（多賀 2001、p.79）なのである。

表２に、調査対象者の詳しい属性などを示す。

〈表２　調査対象者の概要〉

	学年	年齢	学校の属性	家族構成	身長（cm）	体重(kg)
Ⅰ	高２	16歳	都立・共学	父・母・兄・姉	178	82
Ⅱ	高３	17歳	私立・別学	父・母・弟	170ちょっと	50.5
Ⅲ	高３	17歳	都立・共学	父・母・弟	172	56
Ⅳ	高３	17歳	私立・共学	父・母・姉・祖母	171～2	53～4
Ⅴ	高２	16歳	私立・共学	父・母・弟	173	69
Ⅵ	高２	16歳	私立・共学	父・母・姉・妹	170	60
Ⅶ	高３	17歳	私立・別学	父・母・姉	181	67
Ⅷ	高３	17歳	都立・共学	父・母	171～2	52

※ 身長、体重は、本人が述べた数値である。

３．青年期における男性の身体像の認知

以下、インタビュー調査を基に、青年期の男性が、日々の生活の中で、身体をどのように認知しているのかを検討していく。

⑴　非対称的な身体像

一般的な男性、女性の身体に対して、青年期の男性はどのようなイメージを持っているのだろうか。まず、男性の身体に対する発言をみていく。

①「大きな男性」という身体像

高校３年生の男性であるⅡは、自分の理想の身体像について、次のように述べた。

Ⅱ：背が高くて、身体のバランスがとれた人。……最低でも75くらいは欲しいんですけど……あんまり背がでかいっていうのも、変な感じなんで。まあ、でかくなっても180、までぐらいがいいですね。……やっぱバランスがいいのがいい。いやあ、体格っすね。この身長でも、この身長でこの体重って人でも、すごいバランスがとれた人もいるだろうし。腕とか足がすごい細くてお腹だけすごい出てて、この体重って人もいるかもしれないし。（高３）

Ⅱの場合、男性の理想の身体像において、背と体格が重要視されているようである。体格というのはバランスのよさであり、背が極端に高すぎるのも、肉の付き方が偏っているのもよくないと思っている。

背と体格というのは、今回の調査ではどの男性にもみられた発言であり、男性の身体において、背が高いということと体格がよいということは、理想の身体像として、かなり内面化された基準であると考えられる。また、Ⅱ自身の身長が170㎝強であり、これぐらいは欲しいという願望とともに語られていた。

Ⅲも高校３年生の男性であるが、彼は、女性からみた男性というものを、強く意識していた。

Ⅲ：なんか、最近の、女性がみる男性って、なんか、昔は、こう、ワイルドみたいな感じだったのが、なんか、今ちょっと変わってきてると思うんですよ。人によると思うんですけど、全体的にみてみるとなんか、こうなんか。細い人とか、細い人っていうくくり自体がおかしいですけど。〔肌の〕色〔が〕黒い人だったら、〔肌の〕色〔が〕白い人〔のほうがいい〕みたいな。ちょっと、偏りが出てきてると思うんですよ。（高３）

と、Ⅲは男性の身体に対する最近の女性の評価について語った。そのような価値観からみると、現在の自分の体型は、「薄いんですよ。首から下が、ちっちゃい、どうなんですかね。女の子みたいって言われますね。女の子に。肩とか手とか、あとウェストとかもすごい細いし、なんか。ほんと、女の子みたいな体型なんですよ」と思っているが、「女の子にしてみたら、これが悪いことだとは思ってないと思うんですよ。『あ、やだ』とかじゃなくて。羨ましい対象にみられるんですよね」と認知していた。だが、あくまでも、最近の社会の傾向に対する客観的な認識であり、自分自身が、女性から「羨ましい」と評価されることに関しては、「それは、はっきり言って微妙なんですよね。なんか」と言い、決して、「喜びたくはない」と続けた。自分としては、やはり「もうちょっと普通になればいいんですよ。男として。普通に」と思い、「ワイルド」で「ガタイがいい」というものが男らしい理想の身体であると述べた。

今回の調査において、男性が男性の身体について語る場合、そこには常に自己の身体についての意識があり、自分はどうなりたいのかという理想の身体像と同時に、自分の現在の身体がどのような状態であり、どのような評価を受けるのかということを含めた上で発言していた。

②　「小さな女性」という身体像

では、青年期の男性からみた、女性の好ましい身体像はどのようなものであろうか。

Ⅲは女性の身体に対して、主に身長に関して次のように語った。

Ⅲ：そりゃ、ちっちゃいほうが、大きいよりは。いや、別に高くてもいいんですけどね。高い人だと、釣り合わなくなっちゃうんですよ。たとえば、もともと168とかその辺の人が、ヒールを履いたりするじゃないですか。そうすると、175とかいっちゃうじゃないですか。3、4とか。そうすると、なんか、やっぱ。あ、そうですね。この女が悪いとかじゃなくて、自分に戻ってくるんですよ。俺は、こんな身体で。自分がもっと背が高ければって。でも、やっぱり、女の子からしてみると、160ぐらいって、普通じゃないですか。今の時代って。女の人からしても、僕ぐらいの身長でも、全然、それぐらいでいいみたいな。言う人って多いんで、だから、いいのかなって。自分が、どうなのかな、〔女性の身長が〕高いほど、やっぱ、〔自分と身長が〕変わんないわけじゃないですか。自分が情けない。ダサいって思うんだ。……あとは、体型ですね。……僕的に、僕がこういうふうな体型だと、全然、別に痩せてはないんですよ。手とか、足の

先とか細いけど。痩せてはない。で、その……。だから、体型がいい人。ガタイがいい女の人とか見ると、僕、自分に返ってくるんですよ、また。何で、逆になれよみたいな。……釣り合いで、釣り合いで考えて、あの……。多分、無意識のうちに考えて、あ、この人はあんま、僕とは合わない。付き合わない。て決めると思う。多分、自分の気づかないところで。（高３）

Ⅲは、172㎝、56kgの自分の身長および体重と比較して、自分の体型と釣り合いがとれているかどうかが女性の身体について重要であると考えているようである。「今の時代、女性で160㎝あるのは普通」と言いながらも、やはり自分の身長と比較したとき、自分の身長とあまり差がないと、自分が情けなく思えるため、女性の背が小さいほうがよいと思うのである。

Ⅲの場合、自分の隣に並ぶ女性の姿を思い描き、自分より、小さくて細い女性の姿というものを、好ましい女性の身体像として認知しているようであった。あくまでも、「自分の」問題であると主張するように、背が高い女性が「悪い」と思うのではなく、自分を情けないと思いたくない、すなわち自分が劣位にいると感じたくないのである。

高校２年生の男性Ⅴは、さほど女性の身体について身長にはこだわらず、あまり小さすぎるのも嫌だと言い、「この〔自分と女性との身長の〕差があるとなんか困るじゃないですか。……なんか、なんか、ちょっと、嫌。そんな、見下してるみたいで嫌じゃないですか。」と言う一方で、次のようにも語った。

Ⅴ：やっぱ、でかいほうが、いろいろと。いいっす。遊ぶときとか。女の子と、遊ぶときとか。身長が。相手が、ブーツとか履いてて、同じとか嫌じゃないですか。と、もっと〔自分の身長が〕でっかいほうがいいなって。……〔自分のほうが〕ちょっと、ちょっと高いぐらい。（高２）

と、やはり、自分と比較して、身長差がありすぎるのも嫌だが、自分のほうがちょっと高いくらいがちょうどよいと考えていた。身長が女性と「同じとか嫌」であり、自分の身長より低いという前提において、高いほうが好ましいというだけなのである。

Ⅱは「ちっちゃい」という表現を用いて、次のように語った。

Ⅱ：ちっちゃい人。ちっちゃい人です。やっぱ、ちっちゃいほうがいいですよ。……ちっちゃければ、ちっちゃいほど。……やっぱ、なんか、ぎゅっとした時とか、ちっちゃいと、なんか「よしよし」って感じで。ま、それは、やっぱ人によって違うだろうし。……あ、でも、痩せてんのは嫌ですね。すごい痩せてんのは嫌ですね。本人は、すごい痩せてて、それが、自分でいいだろうって思ってるかもしれないっすけど、すごい、そういうのは嫌ですね。無理やりなダイエットとかしてて、めっちゃ細いとかは。そこまでしなくてもいいんじゃないか、みたいな。（高３）

自称170㎝ちょっとの身長であるⅡは、痩せ過ぎていることへは嫌悪感を示しながらも、身長が「ちっちゃく」、自分が「よしよし」と女性の頭をなでることができる構図を望ましいと思っている。

なぜ、男性は自分より背の低い女性の身体像を好ましく思うのであろうか。そのように思う理由を、Ⅲは次のように語った。

Ⅲ：やっぱ……。やっぱり……。昔から、そういう姿をみることが、父親のほうがでかい、母親のほうが小さい。そういうイメージがついてるんで、そういうもんだと思って。そういうもんじゃないとも思うけど、やっぱり。あと、みんな、「そういう身長じゃないよ」って言いますけど、やっぱり、人間意識しますよね。（高３）

Ⅲには、はっきりとした理由があるわけではないけれど、男性のほうが大きくて、女性のほうが小さいという構図が自然なものであるという認識があるといえるだろう。その際、自分の両親の姿がモデルとなっていた。また、「身長は関係ない」という言説があることも知っているが、それは建前であり、皆、身長を意識しているはずだという認識を持っていた。

自分の身長が170cmであるⅥも、女性の身長について、家族との関係を交えて次のように語った。「〔家族は〕みんな、背高くて。お姉ちゃんも68あって。妹も、まだ中３なんですけど、66あって。お父さんも75以上ある。78」という家族環境にあるため、姉から「『男ならもうちょっと、伸びとけよ』みたいなこと言われ」たり、女性の同級生から「もうちょっと背が高かったら」と言われたりしたことで、背がもっと高くなりたいとは思っていた。しかし、女性の身長に関しては、「うちにいるの〔自分の姉と妹〕が、結構高いし、あんまり〔女性が〕背が高いのは気にならない」と語った。

つまり、女性の身体像に関して、身近な他者、特に家族の姿がモデルとなっていると考えられる。

今回の調査の中では、大きな男性と、小さな女性という身体像が、青年期の男性において、認知され、内面化されていることが、確認された。

マスコミでは、華奢な男、細い男、ユニセックスな身体というものがクローズアップされ、身体のジェンダー差が縮小しているかのようにいわれるが、今回の調査においては、そのような身体像は理想あるいは好ましいものとしては認知されていなかった。あくまでも、背が高く、体格がよいのが、男性の身体であり、背が小さいのが女性の身体として、認知されていた。

その理由のひとつとして、〈家族の姿〉という、マスコミに接する以前の刷り込みが考えられた。また、それらは絶対的な基準というよりも、自分の身体に対して、異性の身体が大きいか小さいかということが判断基準となっていた。自分の身体像との比較において異性の好ましい身体像を規定しているといえるであろう。

自分の身体を変えるにも限度がある。男性は自分が劣等感を抱かなくて済むように、自分より小さな女性を好む。身体の非対称性は深く内面化されていると考えられる。

だが、大きな男性と小さな女性といっても、Ⅱのように、単純に小さければ小さいほどよいと考える者もいれば、Ⅴのように、自分より小さいほうがよいが、小さすぎるのは「見下しているようで嫌だ」と考える者、Ⅵのように、自分の姉や妹は女性としては背が高いので、自分は背が高くなりたいとは思うが、女性の身長はさほど気にしないという者がいたように、その意識には少しずつ差異がある。この３人は皆、170～173cmの身長であり、彼ら自身の身長の差異によるものではない。Ⅵが家族の姿から、背の高い女性を普通であると認識しているように、身近な他者の影響によって、男性らしい身体像、女性らしい身体像を描き、自己の身体像に対して劣等感を抱いたり、抱かなかったりすると考えられる。

⑵　数値化され、ジェンダーに絡めとられていく自己の身体像

ここまでは、今回の調査において、大きな男性と小さな女性という構図を青年期の男性が内面化して

いることをみてきた。では、そのような非対称性をもつ男女の身体像を前提として、自己の身体像をどのように認知しているのだろうか。

①　自己の身体を語る

まず、自己の身長についての発言に注目する。高校３年生の男性Ⅱは中学３年生の時に部活を辞め、インタビュー当時はアルバイトにいそしむ日々を送っていた。同じく高校３年生の男性Ⅷは陸上部に所属し、部活中心の生活をしていた。

Ⅱ：今、70ちょっとですね。「ちょっと」って書いといてください〔メモをとる研究者に対して〕。70と70ちょっとは、ちょっとやっぱ違うんで。〔71とか72ではないのかという問いに対して〕71ぐらいですね。ははは。でも、70じゃないですよ。71ですよ。（高３）

Ⅷ：171センチ。１センチは、いってるから、１～２センチぐらいと。（高３）

両者とも、170cmにこだわっていることがよくわかる。Ⅱはメモを取ろうとした研究者に対して、「170」ではなく、「170ちょっと」と書いて欲しいと要求している。171cmや172cmではないのかという研究者の問いに対して、強いて言えば171cmであり、170cmではない、すなわち、170cm以上は確実にあることを主張した。Ⅷは171cmと言った後に、171cmは超えているから、171cmから172cmであるとわざわざ訂正している。これらの発言からは、170cmを超えているかが非常に重要視されていること、１cmでも高いほうがよい、１cmでも高くみせたいという気持ちがあることが読みとれる。

身長が170cmを超えているかが重要視されていることは、自己の身体への評価を述べた、次の発言からも明らかである。Ⅱ、Ⅷと同様に、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは実際の身長が171～173cmであった。なお、ⅢとⅣは高校３年生の男性であり、Ⅴは高校２年生の男性である。

Ⅲ：まあ、僕、今、172なんですけど。……172っていったら、まあ、べつに。まあ、平均、ぐらい。……160だったら悩みますね。眠れませんですよ。〔自分の身長は〕72ですけど。ちょっとそうですね、60は、ちょっと。今のぐらいだったら、まだ許せるかなって。〔70切ってしまうと〕ダメですね。相当悩みますね。（高３）

Ⅳ：170、１～２ぐらい。もうちょっと欲しかったかなぐらい。……これでもたぶん、結構、普通かもしんないんっすけど（高３）

Ⅴ：今、173センチぐらい。……自分だけちっちゃいの嫌だなって。……そんなちっちゃくもないけど、大きくもないし（高２）

Ⅲの「まだ許せる」、Ⅳの「普通かも」というように、多少自信はないようであるが、一応は現在の自分の身長をよしとしているようであった。Ⅴの「ちっちゃくもないけど大きくもない」というのが、素直な自己の身長への評価なのであろう。Ⅲは170cmを切って、160cm台だと眠れないほど悩むであろうとも語っている。身長がもっと高ければという希望は持ちつつも、一応170cmは超えているということで自分自身を納得させていた。

以上の結果からは、青年期の男性では身長170cmというラインを超えているかどうかが自己の身体につ

いて語る際に重要になっていると考えられる。

だが、そのラインを超えていれば、満足だというわけでもないようである。もっとこうなりたいという願望を、ほとんどの者が抱いていた。

② 自己の理想の身体像

青年期の男性においては、身長と体格に関して理想の身体像が述べられた。

Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵの発言を取り上げる。彼らはともに、170～173cmの身長であった。

Ⅱ：最低でも75くらいは欲しいんですけど。……身長は、でかいほうがいいっすよ。（高３）

Ⅲ：もうちょっと欲しいなって。175～6。まあ、あと３センチぐらいですかね。（高３）

Ⅳ：170後半ぐらい。……マッチョ憧れなんで。マッチョになってみたい。（高３）

Ⅴ：身長がもっとほしい。今、173センチぐらい。あと、10センチぐらい。……でかいほうがいい（高２）

Ⅵ：背がもうちょっと。75ぐらい。……筋肉質な人が〔理想〕。（高２）

Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵは、175cm以上の身長で、筋肉質な身体を理想の身体像として描いていた。１節で自己の身体を基準に男性と女性の身体を比較していることを指摘したが、女性より大きな身体という基準だけではなく、175cm以上で筋肉質な身体という基準があることがわかる。その最低ラインが、前項で述べたように、170cmの身長ということになるのだろう。

身長についての数値的な観点が非常に重要視されていた。前項でも、自己の身体について語る際に、170cmにこだわる様を取り上げたが、このように数値にこだわるのはなぜであろうか。その背景として、赤ん坊のときから、身体を測り、記録し、比べ、分析されてきた歴史、および、学校教育における身体測定の歴史が挙げられるだろう。

今日、子どもの身体測定は、「教育の基礎としての個々の児童の心理発達の把握を位置づけ、さらにその基礎」（朝日新聞社・全日本健康推進学校表彰会 1998、p.309）となるものと捉えられており、その目的は「単に健康管理だけに求めず、健康指導の基礎、今日風に言うなら健康教育としての意味」（同）をもつとされる。そのように位置づけされる身体測定に対し、山下大厚は次のように指摘している。

> 私たちは普段ア・プリオリに、身体を測定することや、それに用いられる尺度について、客観的で無色透明なものだと考えている。しかもそれらは、解剖学的身体構造から演繹的に導きだされる客観的な測定の道具であるのだと。しかし、その成り立ちについて繙けば、身体を測定する眼差しの裡に、明確な政治的意図を見出すことができるのである。（山下 2001、p.3）

つまり、イアン・ハッキング（Ian Hacking）が論じたように、統計によって得られた数値が、一種の社会的リアリティを構築し、逆に対象に対して統制力を持つようになるのである（Hacking 1990＝1999）。

このような数値によって身体は測定された後、学校教育の現場では、１㎜単位で背の順に並ばされる。瀬地山角（2001）は、この背の順で並ばされたことに対する苦痛と、それから開放された時の安堵感を

語ると同時に、身長を「あれほど可視化して並べるというのは、何の合理性もないどころか、成績を廊下に張り出すのと同じような効果を持っている」（瀬地山 2001、p.30）とも述べている。

身体測定によって身体は数値化され、標準化されることによって、個々人の身体はこの標準化された身体と比較され、孤立した、操作される対象／客体と化すのである（山下 2001）。

中島宣行・太田鉄男（1980）や斉藤誠一（1985）が明らかにしたように、青年期において女性ではバスト、ウェスト、ヒップ、ふともも、体重など、男性では身長が重要視される。身体はジェンダー化されており、関心の対象となる部位が男性と女性で異なるのである。また、海野弘（1998）が指摘したように、メジャード・ボディ（計測された身体）、つまり身体が計測され客観的に目に見えるものとなることで、女性はダイエット産業へと組み込まれていった。一方で、身長というのは見えやすく、日常生活においてごまかし続けることは困難である。瀬地山（2001）が指摘したように、背の順で並ぶという形で序列化も行なわれる。身体が数値化されることにより、男性の身長へのこだわりはよりいっそう強化されると考えられる。

また、理想の身体像として、具体的な有名人の名前などではなく、「背が高い」「筋肉質な」といった形容詞で語られていた。理想の身体像である著名人たちを「羨ましい」と思ってはいるが、「それに影響されることはあっても、それになりたいとかはないですけど」（Ⅲ：高３）といったように、理想はあくまでも理想と思っているという発言がみられた。また、Ⅳ（高２）は「格好いいと思うのは。同年代だと、堂本剛とか」であると言い、「〔背は高くないけれども〕ファッション性とか」が好きであると語った。

つまり、自己の理想の身体像としては、マスメディアに描かれるビジュアル的な像よりも、数値的な認識がより重要であるといえるであろう。

１節で、女性の身体を自己の身体を基準として比較し、大きな身体が男性であり、小さな身体が女性であるという、身体の非対称性を内面化していることを指摘した。自己の身体に関する語りからは、男性自身が、その価値基準を内面化し、もっぱらその基準で自己の身体を評価していることがわかった。

⑶　自己の身体像と家族及び友人との関わり

ここまでは、自己の身体像および理想の身体像の語りにおいて、「男ならば……」「女ならば……」という意識をみてとることができ、今回の調査において、青年期の男性がジェンダー・ステレオタイプの身体像をもっていたことを確認してきた。では、このような身体像は、どのように形成されていくのであろうか。身体像は、他者と関わり、社会化されていくことで形成されていくとされる。１節で、両親や姉妹の姿がモデルとなっていることを指摘したように、身近な他者の影響が強いと考えられる。そこで、家族および友人との身体に関する会話がどのように認知されているかに注目する。

母親や姉から、身長に関して言われることが多いという発言がみられた。

Ⅳ：僕を見て、〔母親が〕しょっちゅう言ってますけど、身長とか、体重。ぼくめっちゃ軽いんですよ。そういうこともよく言われます。……「あなた、何でそんな細いの」って。「バカやろー」っつって。そのまま逃げて。……「身長伸びねえか」とか、嫌味たらしく言ってくるんで。（高３）

Ⅴ：〔母〕親がすごい言うんですよ。……嫌ですね。それで、背、もっと、伸ばしたいなって思ってるんで。……「全然伸びないわね。どうすんの、あんたそんなにちっちゃくて」て。（高２）

Ⅵ：身長もうちょっと伸びないかしらねとか言われますね。お母さんとか、お姉ちゃんとか。……「男ならもうちょっと、伸びとけよ」みたいなこと言われますね。（高３）

Ⅶ：家族とは。身長しか言われません。身長だけですね。そのからだに関しては。服装は、別に自分で勝手に決めてるんで。特にない。（高３）

Ⅳ、Ⅴ、Ⅵは170～173cmの身長であり、Ⅶは181cmである。本人の実際の身長と関わりなく、男性の場合は家族との会話において、身長が話題となるのであろう。更に、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵの場合は、「もっと伸びない」のか、「ちっちゃ過ぎる」のではないかといったことを「しょっちゅう」言われた経験をもっていた。

また、Ⅴは、家族構成を話す際、「弟がいるが、でかい」と述べ、弟に「抜かれると嫌」だと、はっきりと意識していた。Ⅴは、先に取り上げたように、母親にちっちゃいと言われて嫌だとも思っていた。

Ⅴ：弟が。弟でかいんですよ。今、中１なんですけど、163cm。抜かれると嫌ですね。

高校２年生のⅤは現在173cmであるが、５歳下の弟との身長の差が10cmであることに危機感を感じていた。

高校3年生のⅡも中学３年生に弟がいるが、

Ⅱ：そこ〔身長を競い合う〕までいかないですね。まだ、俺のほうがでかいんで。大丈夫ですよ。それは。そんなちびじゃないですよ。……弟も伸びてますね。いや、負けてらんないなと。（高３）

と、まだ確実に自分のほうが大きく、弟に負けるほど自分は小さくないのだと語った。「そんなにちびじゃない」という言葉には、Ⅱの「男として」のプライドがみえる。だが、「弟も伸びてますね」と続け、「負けてらんない」と、危機感を抱いていることは否めないようであった。

家族との会話で出てくるのは母や姉の姿であり、父親の姿はみえない。「オヤジとは、あんましゃべってなくて(笑)。オヤジ、ちょっと嫌いでしゃべってなくて。」（Ⅱ：高３）、「親父とはそんなに会わないんですよ。仕事とかで。」（Ⅳ：高２）というように、会話そのものが行われていなかった。同性のきょうだいとの間では身長の比較が行われ、競争相手として位置づけられていた。

母親や姉から「男ならば」という基準に基づいて評価が下されるばかりで、受容してくれる同性の存在が家庭内にないといえるだろう。これは、上野が指摘するように、「私生活から疎外された父親像、子どもと時間を過ごしても話題も共有できない父と子の断絶は、男の『宿命』ではない。むしろ近代が生んだゆがんだ『男らしさ』の産物である」（上野 1995、p.15）といえる。そして、彼らにとって、その父親の姿が「男らしさ」のモデルとなると考えられる。

「身長で負けたくない」という意識は、友人との会話においては更に顕著であった。身長に関して、あくまでも友人は競争相手として認識されていた。

Ⅱ：いや、負けてらんない（高３）

Ⅲ：身長、やっぱ、低いほうだと思うし、なんか、やっぱ、身長低いと、身長高いやつからなんか、見下されてる感じがするじゃないですか。それが、癪に障ってしょうがないんですよ。（高３）

Ⅳ：〔身体測定があって〕比べ合いしましたよ。「いや～、負けてる」とか言って。身長と座高ですね。座高勝っちゃうと、へこみますね。〔身長は〕僕はもう、だいぶ前に止まってたんですけど。１年のころちっちゃかったやつに抜かれたりすると、やっぱ、悔しいですよね。（高３）

Ⅴ：自分が嫌っていうんですか、もっと身長があればいいなって。……負けてるようにみえちゃう。……身長で負けてたくない。（高２）

Ⅵ：この前も身体測定あったんですけど、それで……〔身長が〕勝ったとか、負けたとか。（高２）

友人との会話の中身は「勝ったか、負けたか」であり、それ以上の会話は行なわれていなかった。彼らは、身長を比較して自分のほうが低いと、「負けている」「見下されている」と感じ、そう感じることが「嫌」で「癪に障る」のである。同性同士の比較においても、自分のほうが身長が低いことを嫌だと感じ、許容し難いのであるのだから、女性よりも身長が低いことはもっと許容できないことなのであろう。

大きな男性と小さな女性という構図を前提にしつつ、更に、大きな男性の中でより大きな男性が最も好ましく望ましいものとして認識されているのである。

家族や友人との会話においては、「〔身長で負けるのは〕嫌だ」「友達には負けたくない」「負けると癪に障る」としか思えない青年期男性の姿がみてとれた。会話は「勝ったか、負けたか」であり、そこで生じた「嫌だ」といった感情を語り合ってはいなかった。男性にとって身体について語る場は、あくまでも評価され、競い合う場であると考えられる。これは、伊藤が「会話そのものが、ある種のゲームとして、競争の手段になってしまう場合も男性の場合しばしばあるよう」であり、「男性は日常生活においても、自分の気持ちを率直に相手に伝える関係レベルでのコミュニケーションに欠陥があ」ると指摘することと重なる（伊藤 1996、pp.113-114）。会話は競争であり、コミュニケーションの手段とはなっていないのである。同性はあくまでも競争相手であり、自己の身体が数値によって比較され、自分が劣位にいると感じることに苦痛を感じたとしても、それを語る場はない。語られない苦痛は存在しないものとみなされ、競争することは当然視されたままである。男性にとって、競争から抜け出すことは困難な状況であるといえるのではないだろうか。

⑷　競争としての意図的な身体加工行為

ここまでは、大きな男性と小さな女性という身体像の内面化と、理想の身体像と比較の上で、自己の身体像が認知される様をみてきた。ところで、今回の調査では、理想の身体像に近づけるために、ダイエット[3]、筋肉トレーニング、身長を伸ばすための運動や食品の摂取などの、意図的な身体加工行為が行われていることも分かった。それらの行為には、どのような意味があるのであろうか。

①　家族・友人との情報交換

意図的な身体加工行為を行う際、実行に結びつくのは家族や友人からの情報であった。

Ⅴ：友達がやってて、今だとなんか、アブトロニックってあるじゃないですか。あれは、なんか、

すげーとか言ってるけど、その身長の機械で伸びたためしがない。伸びたんだけど、すぐまた戻っちゃった。（高２）

Ⅵ：友達からなんか、筋トレの仕方とか。（高２）

Ⅴは、友人からの情報に基づき、効果があるものとないものと情報を分けていた。Ⅵは、友人から効果的な筋肉トレーニングの方法を聞き、実行していた。

雑誌やテレビからの情報は、目にする機会が多く、目にすると、とりあえず試してみるということはあっても、情報を得るために、わざわざ雑誌を買ったり、テレビのチャンネルを合わせて番組を見るということを行っている者はいなかった。コンビニエンスストアで毎日のように適当に立ち読みをする中で情報を得るというⅦの行動は、現代の都市生活における高校生の生活状況をよく表したものであろう。情報が氾濫し、能動的に情報を集めようとしなくても、勝手に集まってくる。実際に行動に結びつくかどうかは、家族や友人が試してみて効果があったかどうかの情報が判断基準となっていた。深夜の通販番組で扱われている商品名が複数の者の発言の中にみられ、マスメディアからの情報は、家族や友人と交換し共有することによって、より強化されているといえるだろう。

②　友人と一緒に行う意図的な身体加工行為

高校３年生の男性Ⅶは、効果があるかどうかといった情報の共有だけでなく、実際に友人と一緒に行うことがあると認識しており、身長を伸ばすための薬に関する友人との行動を次のように語った。

Ⅶ：友達の身長が低くて、なんか、薬を飲むとかって色々あるじゃないですか。その身長伸ばすための。そういう雑誌の裏とかに、身長法とか、いろいろあるじゃないですか。それをなんかいろいろ試したりとか、電話したりとか。電話して、それで、なんかお試し期間みたいなのあるじゃないですか。そういうの「頼もうぜ」とか、休み時間とかやりますよ。
〔その背の低い子に、「おまえ試してみろよ」と渡すという発言への、自分では使わないのかという質問に対して、〕俺、別に使わないっすから。必要ないから。そいつ〔背の低い友人〕も、伸びたいって思うじゃないですか。ちっちゃいから。だから、別に。本人は嫌がらないですよ。（高３）

Ⅶ自身は、身長181cmであり、これは男性の理想の身体像としての身長175cmをはるかに超えたものである。本人も自分の身長には十分満足していた。休み時間に、皆で雑誌を見ている際、電話をかけて、お試し用の身長を伸ばす薬などを手に入れようとしている。Ⅶは「ノリ」で行っているようであった。

また、Ⅶはお試し用の薬を渡された背の低い友人も嫌がってはいないと認識しているが、果たしてそうであろうか。自身の身長が170～173cmである、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵは次に示すように、筋肉トレーニングのほか、身長を伸ばすために牛乳を飲んだり、成長ホルモンが出るため身長が伸びやすいと人から言われた夜に走ったりするなどの努力をしていた。

Ⅱ：牛乳、前に飲んでました（高３）

Ⅳ：筋トレしてますね。腹筋とかを。（高３）

Ⅴ：牛乳は飲んでるし。……身長伸ばすために夜走ったり。（高２）
Ⅵ：夜よく走ってます。……筋トレもたまにやってます。腕と、胸筋と、背筋。（高２）

一緒に友人と楽しんで行うというよりは、一人、黙々とやっているようである。また、先述したように、170cm前半の身長に不満足ではあるが、170cmは超えていることで自分を納得させている状態であり、友人に身長で負けていることに対して、「見下されている」ように感じ、「嫌」で、「癪に障る」と認識している。そして、嫌な思いをしなくて済むように、さまざまな意図的な身体加工行為を行なっていた。身長181cmのⅦにしてみれば、身長を伸ばすための薬の試供品を友人にあげることは、好意であり、背の低い友人も背が高くなりたいわけだから嫌がってはいないと考えている。だが、それはあくまでも「より大きな男性」であるⅦの立場からの考えに過ぎないと思われる。Ⅶは自分には必要がないからと、実行することはないことからも、そのことがうかがえる。これは、江原由美子の「からかいの政治学」(1985)の論を援用し、須長史生が『ハゲを生きる』(1999) の中で〈人格のテスト〉として論じたものと同質のものであるといえよう。「見下されている」ように「感じる」だけであるので、相手に対して何も出来ず、また、より大きな男性からの「好意」に基づく行為を拒否することも出来ない。そして、身長を伸ばすという目的に一人で向かっていくしかないのである。

情報の共有は行っていても、同じ目的に向かって、一緒に意図的な身体加工行為を行うということは今回はみられなかった。情報を交換はしても、コミュニケーションの場とはなっておらず、一人黙々と筋肉トレーニングや夜中のランニングをする男性の姿がある。男性にとってはやはり、あくまでも友人は競争相手であるともいえるだろう。競争から降りることができないが故に、身体（特に身長）にこだわることに縛られているともいえるのではないだろうか。

考　　察

身体の問題は女性の問題とされてきた。フェミニストたちの研究の蓄積により、女性の身体に関するジェンダーの問題は、ある程度明らかにされてきた。だが、これは同時に男性の身体の隠蔽を意味する。本論文では、男性へのインタビューを通して、男性の身体を可視化することを目的とした。

今回の事例をみる限り、青年期の男性が、大きな男性と小さな女性というように、小さくてか弱い女性の身体像の対比として、常に、大きくて逞しい男性の身体像を描いていることが確認できた。男性も、高い身長や筋肉質な体型に価値を置くという点において、ジェンダーに縛られていたのである。

さらに、家族や友人との関係をみていくと、男性は、競争するという極めて男らしいとされる行為からも逃れることができずにいることが確認できた。男性は、男らしい身体を競い合うという「男らしい」行為の中にいる為、その競争から降りることは、男らしい身体を手放すと同時に、競争という「男らしさ」を放棄することを意味するからである。今回の事例をみる限り、男性にとって、自己の身体について語ることは競争することであり、悩みを共有し合ったり、受容しあったりするなど、自己の身体像を自覚的に捉え直すことは行われていなかった。あくまでも「男らしい」身体像と自己の身体像を比較し、評価するといったように、自己の身体像と「閉じられた」関わり方をしていると考えられる。「閉じられた」関わり方をしている為、「身体」をめぐる男性同士の競争の中に居続け、「男らしい身体」に縛られ続けているように思われてならない。とすれば、男性の身体もまた、ジェンダーに絡めとられていると

みることも出来るのではないだろうか。

身体に関する問題は女性特有のものであるという日常知、およびジェンダー研究における設定そのものが、偏った見方なのであろう。「身体に対する評価は女性のものである」とすること自体、男性側からの一方的な見方でしかない。上野が指摘するように、「男性が『美から疎外』されたとき、女性は『美へと疎外』されただけでなく、その『美』の定義は男性の手中にあった」（上野 1995、p.5）とされてきたからであろう。こう述べることは、単に男性の身体も客体化され、評価されるようになってきたということを意味するのではない。身長や筋肉質な身体にこだわりながらも、男性の身体が、競争の中におかれ、男性同士の評価にさらされてきたということに対して、男性自身が客観的に相対化しておらず、無自覚だったのではないかということを意味している。

男性は、自己の身体について語るべき言葉を持ってこなかったともいえる。男性にとって、競争の中におかれることに苦痛を感じたとしても、それを口に出すことは負けを意味してきたのであろう。男性自らによって、男性の身体は不可視化されてきたのである。

これは、男性の身体に関して、一切、語ってこなかった、語られてこなかったということを意味するのではない。男性を「公と私に分裂させてその一部しか見ようとしなかったり、ステレオタイプに還元してしまう歴史」（荻野 2002、p.118）によって「男自身が自分の身体や性、あるいは性をめぐる行動を社会的、文化的産物として知的に対象化し、相対化する契機が失われて」（同）きたことを意味する。そして、可視化されていないということは、今後の変容も望めない。

取り上げた事例は、男性一般の身体像を代表するものではない。青年期において、個人の身体像が、ジェンダーにいかに絡めとられているかを描いたものである。その語りは多様性をもちつつも、「男らしさ」に縛られていた。須長のいう「鎧を脱げない男性の現実」（1999、p.205）であろう。

一方、先行研究が示すように、女性の身体もまたジェンダーに絡めとられていることは間違いない。だが、それ故に、女性の身体に関する「語り」は重要視され、「経験の理論化」（上野 2002b、p.235）が行われてきたともいえるのではないだろうか。つまり、女性は「男性中心社会の中で、これまでさまざまなかたちで自分が『女』であることと向き合い、その矛盾やそれへの対応を迫られてきた」のに対し、男性は、「男性社会を『当然』のものとして考え」てきたため、ジェンダーの問題を「学校教育の場も含めて、自分の課題として考える機会がほとんどなかった」といえるであろう（伊藤 1996、p.138）。

「男もまた現実には女とは異なる性的特徴を備えた肉体を持ち、『女』に対する『男』という形で記号化された性差の文化を生きている」（荻野 2002、p.113）のである。身体は女性だけのものではなく、男性のものでもあり、ジェンダーによって深く形作られたものなのである。女性の身体と男性の身体の両方を可視化することによって、ジェンダーの働きを総体として可視化していくことができるであろう。日常知を可視化することは、その知を変容させる、すなわち日常知をエンジェンダリングしていくことを意味するからである。

（ふじた・ともこ／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程）

掲載決定日：2004（平成16）年12月７日

注

1　男性の自己意識では「自己へのまなざし」が中核をなすと指摘している。

2　浅野千恵によれば、「日常知（commonsense knowledge）」とは「社会の成員がふだんそれを意識せずにあたりまえのこととして使用している知識」（浅野 1996、p.27）のことをいう。

3　ダイエットという言葉を用いた全調査対象者が、食事制限を含む痩身行為をダイエットとし、食事制限を含まない痩身行為はダイエットとしていない発言を行っていた。よって、本研究では食事制限を含む痩身行為をダイエット行為とする。なお、調査時に、研究者自らがダイエットという用語を用いることはなかった。

引用・参考文献

青木紀久代『拒食と過食――心の問題へのアプローチ』サイエンス社、1996年。

アードナー・エドウィン「『女性問題』再考」山崎カヲル監訳『男が文化で、女が自然か？』山崎カヲル訳、晶文社、1987年。

朝日新聞社・全日本健康推進学校表彰会『全日本健康優良・推進学校の記録　第２巻　子どもをとりまく環境――すこやかな体づくり』港の人、1998年。

浅野千恵『女はなぜやせようとするのか――摂食障害とジェンダー』勁草書房、1996年。

Blumer, Herbert. *Symbolic Interactionism: Perspective and Method.* Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, 1969.（ハーバート・ブルーマー『シンボリック相互作用論――パースペクティヴと方法』後藤将之訳、勁草書房、1991年）。

Boskind-White, Marlene and White, William C. Jr.. *Bulimarexia: the Binge/Purge Cycle*. New York: W. W. Norton, 1987.（マーリン・ボスキン-ホワイト／ウィリアム C. ホワイト Jr.『過食と女性の心理』杵渕幸子・森川那智子・細田真司・久田みさ子訳、星和書店、1991年）。

Bruch, Hilde. *The Golden Cage: the Enigma of Anorexia Nervosa*. Cambridge: Harvard University Press, 1978.（ヒルデ・ブルック『思春期やせ症の謎』岡部祥平・溝口純二訳、星和書店、1979年）。

Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity.* New York; London: Routledge, 1990.（ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳、青土社、1999年）。

江原由美子『女性解放という思想』勁草書房、1985年。

――――.「ジェンダーと社会理論」井上俊ほか編『現代社会学11 ジェンダーの社会学』岩波書店、1995年。

――――.『フェミニズムのパラドックス』勁草書房、2000年。

藤田智子「ダイエットブームの実態と背景――女性雑誌を通しての考察」お茶の水女子大学生活社会科学研究『生活社会科学研究』第７号（2000）: pp.65-80.

船津衛「『自我』の社会学」『現代社会学２　自我・主体・アイデンティティ』岩波書店、1995年。

Gorman, Warren. *Body Image and the Image of the Brain*. St. Louis: W. H. Green, 1969.（W.ゴーマン『ボディー・イメージ――心の目で見るからだと脳』村上久美子訳、誠信書房、1981年）。

Gould, Stephen Jay. *The Mismeasure of Man.* New York: Norton, 1981.（スティーヴン・J・グルード『人間の測りまちがい――差別の科学史』鈴木善次、森脇康子訳、河出書房新社、1989年）。

Grogan, Sarah and Richards, Helen. "Body Image: Focus Groups with Boys and Men." *Men and Masculinities*. 4(3) (2002): pp.219-232.

Guiney, Kathryn M. and Furlong, Nancy E. "Correlates of Body Satisfaction and Self-Concept in Third and Sixth Graders." *Current Psychology: Developmental, Learning, Personality, Social*. 18 (1999): pp.353-367.

Hacking, Ian. *The Taming of Chance*. Cambridge; Cambridge University Press, 1990.（イアン・ハッキング『偶然を飼いならす――統計学と第二次科学革命』石原英樹・重田園江訳、木鐸社、1999年）。

井上章一『美人論』リブロポート、1991年。

井上俊・富永茂樹「小特集／身体と社会　はじめに」『ソシオロジ』第36巻１号（1991）: pp.3-5.

井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編　天野正編集協力『日本のフェミニズム７　表現とメディア』岩波書店、1995年。

伊藤公雄「男の性もまたひとつではない」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編　天野正子編集協力　『日本のフェミニ

ズム別冊 男性学』岩波書店、1995年。
————.『男性学入門』作品社、1996年。
伊藤公雄・牟田和江編『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社、1998年。
梶田叡一『自己意識の心理学』東京大学出版会、1980年。
厚生省保健医療局健康増進栄養課 健康・栄養情報研究会編『国民栄養の現状 平成10年国民栄養調査結果』第一出版、2000年。
————.『国民栄養の現状 平成12年厚生労働省国民栄養調査結果』第一出版、2002年。
マチウ・ニコル＝クロード「男性は文化で、女は自然か？」山崎カヲル監訳『男が文化で、女が自然か？』越智慶子訳、晶文社、1987年。
McCabe, M.P., Ricciardelli, L.A. and Finemore, J. "The Role of Puberty, Media and Popularity with Peers to Increase Weight, Decrease and Increase Muscle Tone among Adolescent Boys and Girls." *Journal of Psychosomatic Research*. 52(2002): pp.145-153.
Mendelson, Beverley K., McLaren, Lindsay., Gauvin, Lise. and Steiger, Howard. "The Relationship of Self-Esteem and Body Esteem in Women with and without Eating Disorders." *International Journal of Eating Disorders*. 31 (2002): pp.318-323.
Michael J. Duncan, and Yalya Al-Nakeeb. "Body Image and Physical Activity in British Secondary School Children." *European Physical Education Review*. 10(3)(2004): pp.243-260.
宮淑子『「女」なんていや！』朝日新聞社、1988年。
森川那智子『みんなやせることに失敗している』集英社、1991年。
諸橋泰樹『雑誌文化の中の女性学』明石書店、1993年。
村松泰子／ヒラリア・ゴスマン編『メディアがつくるジェンダー——日独の男女・家族像を読みとく』新曜社、1998年。
中島梓『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房、1991年。
中島宣行・太田鉄男「身体意識についての研究Ⅱ——大学生のボディ・カテクシス」『順天堂大学保健体育紀要』第23号（1980）: pp.1-9.
荻野美穂『ジェンダー化される身体』勁草書房、2002年。
Orbach, Susie. *Hunger Strike: the Anorectic's Struggle as a Metaphor for Our Age*. New York; London: W. W. Norton, 1986.（スージー・オーバック『拒食症』鈴木二郎・天野裕子・黒川由紀子・林百合訳、新陽社、1992年）。
————. *Fat is a Feminist Issue*. New York: Paddington Press, 1978.（スージー・オーバック『ダイエットの本はもういらない』落合恵子訳、飛鳥新社、1994年）。
オートナー・B・シェリ「女性と男性の関係は自然と文化の関係か？」山崎カヲル監訳『男が文化で、女が自然か？』三上裕子訳、晶文社、1987年。
斎藤学『家族の中の心の病』講談社、1997a 年。
————.『カナリアの歌』学陽書房、1997b 年。
斎藤誠一「思春期の身体発育と性役割意識の形成について」『教育心理学研究』第33号４巻（1985）: pp.336-344.
Schilder, Paul. *The Image and Appearance of the Human Body: Studies in the Constructive Energies of the Psyche*. New York: International Universities Press, 1950.（ポール・シルダー『身体の心理学——身体のイメージとその現象』稲永和豊監修、秋本辰雄・秋山俊夫編訳、星和書店、1987年）。
Scott, Joan Wallach. *Gender and the Politics of History*. New York: Columbia University Press, 1988.（ジョーン・W. スコット『ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳、平凡社、1992年）。
————. *Gender Revisited*. 1999.（「ジェンダー再考」荻野美穂訳『思想』第898号（1999）: pp.5-34.）。
瀬地山角『お笑いジェンダー論』勁草書房、2001年。
下坂幸三『食の病理と治療』金剛出版、1983年。
————.『過食の病理と治療』金剛出版、1991年。
須長史生『ハゲを生きる——外見と男らしさの社会学』勁草書房、1999年。
ストラザーン・マリリン「自然でも文化でもなく——ハーゲンの場合」山崎カヲル監訳『男が文化で、女が自然か？』木

内裕子訳、晶文社、1987年。
鈴木裕也『彼女達はなぜ拒食や多食に走る。』女子栄養大学出版部、1986年。
舘かおる「女性学とジェンダー」『お茶の水女子大学女性文化研究センター年報』第１号（1996）: pp.87-106.
————.「ジェンダー概念の検討」お茶の水女子大学ジェンダー研究センター『ジェンダー研究』第1号（通巻18号）（1998）: pp.81-95.
————.「歴史認識とジェンダー」歴史科学協議会『歴史評論』４号（通巻588号）（1999）: pp.44-52.
多賀太『男性のジェンダー形成——〈男らしさ〉の揺らぎのなかで』東洋館出版社、2001年。
谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、1996年。
Tiggemann, Marika. and Wilson-Barratt, Elise. "Children's Figure Ratings: Relationship to Self-Esteem and Negative Stereotyping." *International Journal of Eating Disorders*. 23 (1998): pp.83-88.
蔦森樹「ジェンダー化された身体を超えて——『男』の身体の政治性」井上俊ほか編『現代社会学11 ジェンダーの社会学』岩波書店、1995年。
上野千鶴子「『オヤジ』になりたくないキミのためのメンズ・リブのすすめ」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編　天野正子編集協力『日本のフェミニズム別冊 男性学』岩波書店、1995年。
————.『サヨナラ、学校化社会』太郎次郎社、2002a 年。
————.『差異の政治学』岩波書店、2002b 年。
海野弘『ダイエットの歴史——みえないコルセット』新書館、1998年。
Uwe Flick. *An Introduction to Qualitative Research*. London: Sage, 2002.（ウヴェ・フリック『質的研究入門——〈人間の科学〉のための方法論』小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳、春秋社、2002年）。
Wolf, Naomi. *The Beauty Myth*. London: Chatto&Windus, 1991.（ナオミ・ウルフ『女たちの見えない敵——美の陰謀』曽田和子訳、TBS ブリタニカ、1994年）。
山本真理子・松井豊・山成由紀子「認知された自己の諸側面の構造」『心理学研究』第30巻第１号（1982）: pp.64-68.
山下大厚「身体測定のポリティクス——子どもの身体へのまなざしと健康優良児表彰」『年報社会学論集』第14号（2001）: pp.1-14.
依田新監修『新教育心理学辞典』金子書房、1979年。